

体育ＴＴの取組

1 体育ＴＴのねらい

かかわりを通してともに伸びる子どもを育てるＴＴのあり方を探る

2 目標

- 個に応じた支援を行い、学習意欲を高め、学び方や技能を伸ばす。
- 複数の眼で子どものよさを見抜き、子どもたちに自らのよさを気づかせることで自己肯定感を高める。
- 複数指導方法の工夫、改善により授業の変革を図る。



3 児童の実態

- 子どもたちは、明るく元気である。しかし、学校外での社会体験の不足、外あそびの減少といった問題は、他地域の子どもたちと同様に見られる。その影響もあり、友だちとかかわり合って学習したり、粘り強く課題を追求したりといった面に弱さが見られがちである。また、自信を持ち自己を肯定的にとらえられにくい子どもたちも見られる。
- 昨年度からのＴＴによる体育指導の積み上げにより、基礎技能や基礎的な学び方は少しずつ定着してきている。
- これまで「かかわり」重視の学習を継続し、仲間と話し合って学ぶなどの学習態度は少しずつ身についてきている。

4 ＴＴ指導における基本的な考え方

- 体育担当として、全学年全学級（特別支援学級は除く）にＴ１として指導にあたる。
- 授業計画の立案と調整を行うとともに年間カリキュラムの作成・修正を行う。
- 学級担任と連携を取りつつ、「運動好きな十津っ子」をめざして、「学び方」と「かかわり方」に重点をおきながら支援を行う。
- 学級担任と複眼で子どもたちを捉えることにより、子どもたち個々の動きのよさや学び方のよさ、かかわり方のよさを適切に評価し、自己肯定感を高めるよう支援する。
- 個に応じた技能的な支援を行うことにより、学習意欲を高め、自主的な学習態度を育成する。
- 体育担当として、教科外体育の計画運営を行い「健康」を核にした特色ある学校づくりを進める。

5 ＴＴ指導実施上の工夫

(1) 年間カリキュラム

- 児童の実態、学校の施設状況などを考慮しながら、基本的な体育年間指導計画を作成した。
- ※体育専科は、各学年年間４０～５０時間をめどにＴ１として支援にあたるように単元の配列を工夫した。
- 基礎技能の習得、学び方、かかわり方の定着をめざして、各領域にまたがって、特に器械運動領域を中心にＴ１として指導にあたるように単元の配列を工夫した。

(2) 週時間割

- 年間指導計画の配列を念頭におきながら、体育担当が支援にあたる時間を保障するために、週時間割の配置を工夫した。基本として１・２・５学年に支援にあたる単元と３・４・６学年に支援にあたる単元をセットとして同時に３学年において体育ＴＴが配置できるようにした。

○運動会期間、水泳期間にも指導にあたるように、臨時時間割を設け、対応した。

【時間割決定の手順】

- ①重点単元等、体育TTが支援にあたる授業実施を想定しながら設定した。
- ②運動場と体育館、プールほか施設状況などを考慮しながら有効な場づくり（環境設定）を想定しながら、専科（音楽・理科）と重複しないよう設定した。

【実施上の留意点】

- ①年間カリキュラムに沿って、副読本、保健教科書を参考にしながら援助にあたった。
- ②雨天時は相談して実施した。（体育館単元優先が原則）
- ③体育担当は（1・2・5年）（3・4・6年）をセットとして援助にあたる。（最低20時間以上）特に低学年の学習を重点化し、単元導入時の指導に配慮して支援した。
- ④全クラスへの「体育びらき」を行ない、全クラスで「体育の約束」等を確認し、学習をスタートするようにした。



（3）学びのパターン化と効率的な授業マネジメント

○「いつでもどこでもだれとでも」をキーワードとした二者関係づくり（バディシステム）や体ほぐしの趣旨を生かした運動から授業をスタートし、「かかわり」の条件の下で心と体の一体化を図る授業づくりを行った。

○授業運営に関わるマネジメントをパターン化することで学び方の定着を図るとともに潤沢な学習従事量を確保した授業づくりを行った。

・インストラクション場面（指示や説明）・環境設定・待機場面・認知学習場面（動きの観察や話し合い）・フィードバック場面（ふり返りや学習記録）・移動場面等

○基本的な学習活動の流れ

①集合、身支度、心構えをして元気に挨拶をする。	②心と体のスイッチオン！※場の準備を含む。	③課題を確認し、活動の見通しを持つ。	④活動1 ⇒認知的学習場面 ⇒活動2 	⑤ふり返りをし、次時の活動の見通しを持ち、元気に挨拶する。※場の片付けを含む。
運動に合わせた集合場所、隊形で起立して挨拶する。	体ほぐし・予備的な運動を行う。	自己目標・自己課題の設定・課題解決の場や技、練習の選択等	ペア・グループでの協働学習や場のローテーション学習、チームでの練習と対戦・演技づくり等 ⇒集合して情報共有・・・課題解決に向けた進捗状況、運動のポイント、工夫、困り感等 ⇒認知的学習場面において焦点化・共有化した内容を意識しながら活動する。 	自己の課題達成状況や運動や仲間とのかかわりについてふり返るとともに次の活動への見通しを持つ。

○集合場面と働きかけ

- ・授業のはじめとおわり…あいさつの声、服装、赤白帽子、課題確認、成果・態度の評価等をする。
- ・運動観察・話し合い…仲間の動き（モデリング）を観察し、ポイントを話し合って理解する。
- ・できた子や発表を見る…仲間を認めたり、互いの出来映えを見合ったりする。（課題の焦点化）
- ・途中で確認、説明等が必要…ゲームの合間の結果や問題点確認、ゲームの補足説明等をする。
- ・リレー等で順番に並んで待つ…全体が集まり、ゲームや運動を開始する。

○全員参加と活動量を保障する環境設定（場や用具の確保）

- ・ バディシステムでの1対1や多数コート入れ替え戦方式でのゲーム、全員シュートでボーナスポイントのルールなど全員参加や活動量の保障を工夫する。

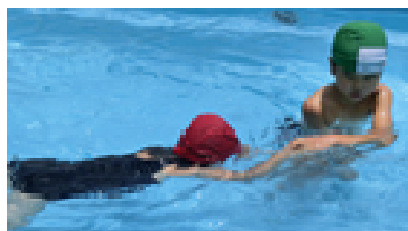
（4）指導形態

○学級T T（走・跳の運道遊び・水遊び・器械遊び・表現リズムダンス）

- ・ 基本的に体育専科であるT 1が全体指導を行い、担任のT 2が個別指導にあたった。T 1は技能面のよさを発揮できるような場や教材を工夫し、技能面のよさを、またT 2は、子どもの学び方のよさやかかわり方のよさを見抜き、全体へ広げていった。

T 2 個別支援
学び方、かかわり方への評価

T 1 全体支援
技能面への支援と評価



○学級T T（陸上運動，水泳，器械運動）

- ・ 基本的にT 1が全体支援を行い、T 2が課題別の学習グループへの支援にあたった。陸上運動を例に挙げると、達成型の楽しみ方を追究する学習場面と競争型の楽しみ方を追究する学習場面を設け、子どもたちの自由な選択学習とした。それぞれの学習場面をT 1，T 2で分担し支援にあたった。水泳や器械運動では、挑戦種目や課題に応じて分担支援を行った。

T 2 学び方を中心とした全体支援
課題別グループへの支援

T 1 技能面を中心とした全体支援
課題別グループへの支援



○学級T T（ゲーム，ボール運動）

- ・ 基本的にT 1が全体支援，T 2がチーム別に支援にあたった。チーム内のかかわり方が深まるよう，人間関係に配慮しながら支援を行った。

T 2 学び方を中心とした全体支援
チーム別に支援

T 1 技能面を中心とした全体支援
チーム別に支援



○学年T T（陸上運動）

- ・ 三種競技（ハードル，高跳び，幅跳びの選択学習）では，2学級の合同体育とし，体育担当と担任2名でそれぞれの種目別に支援にあたった。

T 2 T 3 技能面や学び方を中心
種目別，グループ別に支援

T 1 技能面を中心とした全体支援
種目別，グループ別に支援

6 具体的な取組状況

- 体育専科として、全学年全学級（特別支援学級は除く）の年度当初の体育授業開きをスタートにT1として指導にあたった。
- 単元のプランニングと毎時の授業計画の立案と調整を行うとともに年間カリキュラムの作成・修正を行った。
- 学級担任と連携を取りつつ、「運動好きな十津っ子」をめざして、「学び方」と「かかわり方」に重点をおきながら支援を行った。
- 学級担任と複眼で子どもたちを捉えることにより、子どもたち個々の動きのよさや学び方のよさ、かかわり方のよさを適切に評価し、自己肯定感を高めるよう支援した。
- 個に応じた技能的な支援を行うことにより、学習意欲を高め、自主的な学習態度を育成するようにした。
- 体育専科として、体育主任や体育部員と連携協力しながら教科外体育の計画運営を行い「健康」を核にした特色ある学校づくりを進めるようにした。
- 児童の実態、学校の施設状況などを考慮しながら作成している基本的な体育年間指導計画をもとに、各学年年間40～50時間をめどにT1として支援にあたれるように単元配列を修正しながら指導にあたった。
- 外部講師招聘による全学年での体育科授業を全県に公開し、主体的・対話的で深い学びを生む授業づくりの在り方について協議を重ねた。

成果

- ・体育専科と担任とのT・T制で行う日々の体育授業の継続によって、研究統一教科としての体育授業のあり方が全校的に浸透してきた。
- ・6本の研究授業の実施と校外からの参加者も交えて授業協議会を重ねることで「主体的・対話的で深い学びを生む体育授業」について学びを深められてきた。
- ・「学び方（わかる）」といった思考力・判断力・表現力を全校的な課題ととらえ、重点化する目標とした授業研究を重ねた結果、総括的授業評価において向上が見られた。
- ・T・Tによる複数指導を生かし、活動の場を多く設定しながらそれぞれの場で個別支援に当たった結果、個々の学習意欲や学び方および技能の向上につながった。
- ・T・Tによる複眼で[動き]と[学び方]を分担しながら見抜き、子どもたちに自らのよさを気づかせることで自己肯定感を高めることができた。
- ・複数指導方法として授業における環境設定や評価活動の工夫、改善により授業スタイルが形付いてきている。
- ・年度当初に体育授業における診断的授業評価アンケートを、年度末には総括的授業評価アンケートを取りその変容も分析しながら職員全体で課題共有しながら体育授業を見直すことができた。

今後の課題

- ・今年度、6本の研究授業を行ったが領域や種目をこえた授業を貫く視点が不明確であった。体育科授業研究を通して「身につけるべき資質・能力は何か」「育てたい児童の具体的な姿は何か」を全職員で共通認識し、一つひとつの授業づくりにおいて重点化していく視点を明確化することが課題と言える。
- ・教科間・単元間を連携しながら「運動好き→体力向上」を位置付けた年間指導計画の作成に課題が残る。
- ・運動場の環境整備（鉄棒・登り棒等の下に人工芝設置、自作なわとびボードの設置など）に合わせて児童の外遊びの推進を具体的に計画し、全校児童の運動・遊びへの活性化を進めていく必要がある。
- ・体力調査の全学年実施と記録向上に向けて、学級活動に位置付いた体力向上の取り組み（朝の会での体操等）を全校へと広げていきたい。